

# 影の刻の中で

甲斐太郎

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

2009年4月。10年前に大切な家族を失った少年と少女は生まれ育った地へ戻ってきた。しかし、戻って間もなく彼らは異形の怪物「シヤドウ」に襲われ、秘められていたペルソナ能力を覚醒させてしまう。それが仕組まれたことと知らずに。世界の命運を賭けた激動の1年が今、始まる。

※『ペルソナ！って言いたいけど、資質ゼロなんです』のリメイク版です。

視点はハム子に固定。ハム子が知りようのないところは大幅カットも辞さない所存です。

彼女のヒロインは誰だろな。残念ながら女番長は出てきません。換わりにキタローがログインしました。

※ところで読者の皆さん。人に知られず好き勝手できる時間が自分だけにあつたら何をしますか？

0	0	0	0
4	3	2	1
27	18	9	1

目次

2009年4月26日

日曜日の朝ということでもエントランスのソファにもたれ掛ってまったり過ごしていると、学校のクラスメイトで同じ寮に住んでいる上に一緒の日に編入することになった青髪の少年・有里（ありさと）理（まこと）くんが灰色の髪が特徴の少年をつれて帰ってきた。彼らの手にはそれぞれスーパールのレジ袋がひとつずつ持たれている。

有里くんは私の存在に気付いたようだけど、前髪で隠れている流し目で華麗にスルーし灰色の髪の少年を連れて巖戸台学生寮の台所へ向かう。有里くんと違い、灰色の髪の少年は私に会釈をしてみた。特にすることもないので、私も彼らの様子を見るために台所に向かう。すると、有里くんと灰色の髪の少年が冷蔵庫に物品を入れつつ談笑していた。

「あはは、先輩の言う通り一般家庭には縁の無いパスタマシーンが普通に置いてある。冷蔵庫も業務用で超がつくほど大容量なのに、中身がプロテインの缶だけって勿体無いなあ」

「自炊するの面倒だから、いつもは外で済ませている。……その彼女も」

「なっ！ち、ちが……」

近づいてきていたことに気付いていたのか、有里くんは無愛想な表情で私を指差した。面倒臭くて自炊をしていない有里くんと一緒にしてもらいたくないと反論は大いにしなかったのだが、現状はその通りなので私は渋々開きかけた口を閉じる。私たちのやりとりを見ていた灰色の髪の少年は優しげに微笑みながら頭を下げて自己紹介を始めた。

「おはようございます。僕は月光館学園中等科3年の鳴上（なるかみ）総司（そうし）って言います。有里先輩とは知り合ったばかりなんですけれど、よくしてもらっています」

「え……、有里くんは？」

「結城（ゆうき）。どういう意味かな？」

「べ、別に他意はないよ」

前髪に隠された瞳から鋭い視線が向けられているのを感じて、私は視線を逸らしつつ苦笑いで誤魔化す。いつも話しかけても「めんどい」とか「どうでもいい」といった風に投げやりに事を済ませようとする彼にしてはとても珍しく感情に機微が見られる。

「ところで有里先輩。財布を拾ってくれたお礼に昼をご馳走することになっていますが、僕は『何人分』作ればいいんですか?」

「料理による」

「一応、ミルフィーユカツにしようと思っっているんですけど」

「少なくとも口止め用にもう1人分必要」

有里くんの視線が私に向く。当然鳴上くんの視線も私に向いた。2人分の視線を向けられた私は、とりあえず笑顔で頷くのだった。

□

鼻歌交じりで手際よく調理をする鳴上くんを台所に残し、私と有里くんはエントランスに移動した。

同じ日に同じ寮に来て、同じ学校の同じクラスメイトになった彼と妙な運命を感じる私であるが、有里くんはそんなことは考えていない様子。彼はソファに沈み込むようにもたれ掛るとテレビのリモコンを適当に押して流れる映像を見ている。CMの度にチャンネルを変えないでもらいたい。

「結城にしては珍しい」

「ほえ?」

ふと思いついたように有里くんが呟く。彼の心の声が聞こえたのかと首を傾げる私だったが、有里くんの紺色の瞳が私に向けられているのに気付き、身を正す。すると有里くんはふいと視線を外したが言葉が続けた。

「いつも誰かの隣で笑っているのに、今日は出かけないの?」

「それを言うなら有里くんもでしょ。いつもダルそうにして、あんまり人と関わろうとしないのに。今日は鳴上くんを寮に連れてきたし」

「別に偶々だよ。散歩していたら近くのスーパーでセールだったらしくて両手にレジ袋を持っていた鳴上がボクに気付いただけ。以前、鳴上の財布を黒澤さんのところに持って行った時に丁度知り合って、今度お礼をもって話だったから、今日の昼飯を奢ってくれて言ったら先輩の家で作るって話になって。真田先輩たちや順平は外出しているし、丁度いいかって思ってた……。あれ？」

「鳴上くーん！もう1人前追加お願いー！」

「え、はーいー！」

有里くんは私を見ると小さく「ありがとう」と呟く。いや、これでもまだ寮にいるゆかりを除け者にしたら、明日から彼女の機嫌取りが大変だから。私はそんなことを胸に秘めつつ苦笑いで答える。

「岳羽も休みなのに部屋にいるとか、華の女子高生なのにどうなの」「いや、私に言われても」

同じクラスメイトの岳羽（たけば）ゆかり。私たちが入院していた時にちよくちよくお見舞いに来てくれた。私たちと同じように10年まえの事故で家族を亡くしているらしいが、学園での彼女はみんなのアイドルのように輝いている。その分、休みの時にだらけてもいいじゃないか。と、ゆかりの気持ちを代弁するように考えていたら、玄関が開く音がした。入ってきたのは野球帽を被りアゴヒゲを生やした少年・伊（い）織（おり）順平（じゅんぺい）であった。

「いやー、俺っちとしたことが財布を忘れちゃったぜ」

「おかえり、順平」

「応よ！つてか、珍しい組み合わせだな、有里に結城っち。っーか、何なんだ？この香ばしい匂いは！」

「今、台所で昼ご飯を作ってるってところ」

「先輩たちは出ていて、有里と結城っちがここにいるってことは、まさかまさかのゆかりっちが手作り料理!?こうしてはいられん、ゆかりっちー！俺っちの分も作ってくれーって、総司じゃねえか！」

「あ、おはようございます。順平さん」

「お、おう。おはよう。っじゃねえ、俺の感動を返してくれ……」

玄関から台所に直行した順平の嘆きの声が聞こえてくる。私たち

は一言もゆかりがご飯を作っているとは言っていない。トボトボと肩を落として戻ってきた順平はソファに腰を下ろす。しかし、順平は笑っていた。どうやら、鳴上くんに自分の分も作るようにちゃっかりとお願いしてきたらしい。

「なあ、有里、結城っち。総司はどつちの伝でここに来たんだ?」

順平は肩越しに鳴上くんの姿を捉えながら尋ねてきた。テレビに向けていた視線を順平に向けた有里くんが手を上げながら言う。

「ボクの方」

「ふーん。総司は横の繋がりがすげーから、何か困ったことがあったらアイツに聞くのもひとつの手なんだぜ。地元民だけが知っている穴場の店とか、料理店の裏メニューとか、お店によって変わる割引セールとかの情報も結構知っているしな」

「そうなんだ。じゃあ、いつも傷薬の購入でお世話になっている『青ひげ・ファーマシー』の割引日も知っているのかな?」

「土曜日に25%オフですよー」

毎夜0時に訪れる【影時間】内だけに現れる異形の塔【タルタロス】。影時間内にはか現れない化け物【シャドウ】が蠢き、塔を攻略するには戦わざるを得ない存在。その強さは千差万別で個体によって強さが異なる。影時間内を動ける人間の心を具現化して現れる【ペルソナ】。そのペルソナの力の中に回復スキルを使えるものもいるが、体力と違い精神を回復する手段はほぼないので小さな傷くらいは傷薬で治すのが一般的。必然的に青ひげ・ファーマシーに行く回数が増えるのだが、もしも割引になる日があるのなら、聞いていて損はない。

「とういか速攻で返事された!しかも結構割引されるんだ。つて、ああ!今日は日曜日だ」

「女性って割引とかセールとか好きだよな」

「……。有里くん、そこに直りなさい。お金に関しては男女関係なくシビアにならないといけないんだよ」

「う、……うん。分かった。……ごめんなさい」

私が凄んだ所為か有里くと順平が震えながら顔を背ける。しかし、有里くんの発言は捨て置いていいものではない。今回、私と有里

くんはタルタロスを進む上で副リーダーとリーダーを任されている。私が副リーダーなのは、戦闘時に広い視野で敵味方の動きを見て指示を出せるから……だと思う。有里くんは普段はこんな感じで『だらー』ってしているけれど、戦闘時の決断力は目を見張るものがある。そこら辺と本来は1人ひとつであるはずのペルソナを何体も保有し入れ替えることが可能で臨機応変に対応できるからだろう。

確かに戦闘時の有里くんは非常に頼もしいのだが、普段がこれの状態なので意味が無い。装備や道具を買い揃えるにはお金はいくらあっても足りないというのに。今は私たち4人だからいいけれど、真田先輩が怪我を治して復帰したら5人分だ。先輩方の話を聞いている限り、桐条先輩も探索を指揮する側ではなく、私たちと一緒に探索する側だと思うから彼女も加わったら6人分である。タルタロスでたまに拾う使途不明金だけでは明らかに足りないのである。

だから、節約できるところは節約してお金を浮かせる必要があるのだけれど、目下の一番の出費は日々の外食代だ。1人につき1日に約1000円の出費である。これを浮かせるにはこの巖戸台学生寮に、普通の学生寮にもいる寮母さんをお願いしてもらえば解決するのだけれど、ここは特殊だからなあ。

「起きて来たなら知らない子が台所で料理しているんだけど」

「あ、ゆかりおはよー」

「今まで寝てたのかよ、ゆかりっち」

「海外のドラマを見ていて夜更かししちゃったのよ。というか、私の質問に答えてよ。彼は何者なの？」

順平の質問に目を擦りながら答えたゆかりだったが、急にシヤキツとして台所で調理している瀬田くんを指差しながら言う。顔を見合わせた私たちは彼女の質問に答える。まず、口を開いたのは私だった。

「順平の知り合いで有里くんが連れて来た鳴上くん」

「中等科の後輩」

「月中の『お嫁さんに来て欲しい人ランキング』の男女両部門で6期連続1位を取っている奴」



「いや、ちょっと待て」

順当に有里くんが答えたまでは良かったが、順平の紹介の仕方に私たちは同時にツッコミを入れる。順平は企みが成功した悪戯小僧のような笑みを浮かべている。

「ふっふっふ。いつもクールな有里やゆかりっちゃんたちに一泡噴かせてやったぜ。というか、このランキングは月光館学園にある新聞部が独自に調査してランキングにしているんだよな。例えば桐条先輩は『お姉さまにしたい人ランキング』、真田先輩は『抱きしめて欲しい人ランキング』にランクインしているんだぜ。他にも色々バラエティに富んだランキングがあるが、残念ながら本人未公認なんだよな。ちなみに学期毎に更新されるから、興味があったら新聞部の部室前に置かれているパンフレットを見るといいぜ」

「変なランキングがあるのは分かったけれど男女両部門で1位っておかしいでしょ。それじゃあ中等科の子達のほとんどがホモになるじゃない」

「ゆかりっちゃん、変なところを気にすんのな。このランキングに関してはアレだ。『色々』……あつて結局、『女子力で最強なのは誰だ』ってことになったんだ。だから、安心してくれ。中等科の男子は普通に男だ」

「なんだか凄く含みをもった『色々』を詳しく聞きたいところだけど、丁度昼ご飯が出来上がったみたいだよ」

有里くんの発言を聞いた私たちの視線が台所に向く。するとその先で鳴上くんが笑顔で私たちに向かって手招きをしていた。

「本日のメニューは『4種のカツと4種の付け合せフレーバーで16の味を楽しめるミルフィーユカツ定食』です。炊きたてご飯はお代わり自由なのでどうぞ、お召し上がりください」

席についた私たちの前に出された料理は、私たちが知るどれよりもよく出来ていた。豚肉を数枚重ねて作るため、間に具材を挟み込めば色々なバリエーションを楽しめる。今回用意されたのは普通の豚肉だけのものと、チーズを挟んだもの、青じそを挟んだもの、ハムを挟んだものの4種類が2切れずつ載っている。そして、付け合せフレー

バーには手作りのタレの他に、黒ゴマを使ったタレやニンニクベースのタレ、そしておろしポン酢が置かれている。

私たちは無言で箸を取る。そして思い思いのカツを掴み、タレをつけていただく。表面はこんがりサクサクで幾層にも重なったせんべいのように、噛むたびに溢れ出てくる肉汁は口の中いっぱい広がるけれど、タレできゅつと味が引き締まっている。有里くと順平は無心でごはんを掻き込む様に食べている。

起き抜けにトンカツを食べることになったゆかりにはちよつと気の毒だったかなと申し訳なく思いながら彼女を見ると、『ぱくぱくぱくぱく』と箸を高速に動かしながら食べていた。

ちなみにその間、鳴上くんは嬉しそうに私たちが食べる様子を眺めていた。

□

「なーんか、いつもより身体が動く気がするんだよね」

「ゆかりもそうなんだ。今日は妙に身体が軽いつていうか。うまく説明できないけど」

鳴上くんが作った昼ご飯を堪能した私たちは帰っていく彼を見送った後、それぞれの時間を過ごした。そして、影時間のタルタロスへ来て普段とは違う、沸き起こってくる力に困惑しながら探索を行っていたのだが、私の主観でもペルソナが「強化」されている気がする。それは戦闘にも現れている。普段ペルソナを色々と交換しながら戦う有里くんはちよつと分からないが、順平のペルソナであるヘルメス然りゆかりのペルソナであるイオ然り、ペルソナが一番得意とする部分が強化されている。順平は物理攻撃がいつもに増して高まっているし、ゆかりが使う風属性の攻撃スキルの威力も普段よりも高い気がする。

「結城」

「うん、どうかした有里くん」

私が考え込んでいると有里くんは声を掛けられた。もしかして

シャドウが近寄ってきていたかなと周囲を見渡す私にその必要はないと言わんばかりに首を横に振る有里くん。

「検証が必要だけど、たぶん鳴上の料理が関係していると思う」

「え？いや、さすがにそれはないんじゃない？」

「それ以外でボクたち4人が同時に強くなる共通点がない。だから、検証が必要なんだ」

「なるほど。けど、検証って何をするのか？」

私が尋ねると有里くんは携帯電話をポケットから取り出して画面を見る。影時間なので電話は使えない、それを素で忘れていたのか真っ暗な画面を見つめつつ、しかめっ面をする有里くんがおかしくて私は少し噴出してしまった。彼は頬を掻きながら携帯をズボンのポケットに入れなおすと米神を押しえつつ言う。

「ゴールデンウィークの何日か鳴上に来てもらって、昼ご飯か晩御飯を作らせる。それを食べてタルタロスに来て検証。もし効果があるようだったら、桐条先輩に直談判して、鳴上をこの寮に入れる」

「普段の有里くんはどこへやら……。でもちゃんと鳴上くんの都合も考えなきゃいけないよ。彼は寮に住んでいないんでしょ」

私が嗜めるように有里くんに言うと、少し冷静になったのか彼は大きく頷いた。鳴上くんは私たちと違って両親と妹と4人で暮らしている。その上、一般人だ。そんな鳴上くんを巖戸台学生寮に引き入れるのであれば、桐条先輩というとても強く強大な女帝をどうにか説得する必要がある。それはとてもなく困難なことだろう。

「とりあえず、『今日は凄かった』って印象を桐条先輩に覚えてもらう必要があるんじゃないかな？」

「……そう、だな。順平、岳羽。攻略のスピード上げるけど、ついてこれるよな」

「確認しているけれど、ぶっちゃけ『ついて来い』っていう命令だよな」「なんか知らんが有里がいつも以上に燃えていやがる。よっしゃー、とことん行こうぜ、リーダーさんよー！」

順平が有里くんと肩を組んで先に行く。やれやれと呆れるような感じでゆかりがその後についていく。私もその後が続くのだった。

2009年4月27日

登校してすぐに全校朝礼があるという話を聴き、体育館へ移動する際にゆかりや順平たちとやり取りしながら何の話だろうと思っていたら、先日の桐条先輩のスピーチを意識したありがたいお話でした。校長先生の意図を察した数人の先生や生徒たちが露骨に嫌な表情を浮かべているが、話をすることに集中している彼は気付かない。中には立ったまま眠るといふ技を披露する者もいるほどである。特徴は青髪の2年生男子。

「結局、校長先生は何を言いたかったんだろう」

「いや、ことわざだか格言だかわかんないけど、聞きかじったことをそのまま話されても分からないって」

「ふあ……ねむい」

「お前は全体朝礼が始まった直後に寝てただろうがっ！」

教室に戻る途中、有里くんや順平たちと会話しながら戻っているといつもの赤いベストを来た真田先輩が廊下で誰かと話をしているのを見かけた。私が足を止めたことに気付いた他の面々も何事かを見る。真田先輩が話しているのはボクシング部でいくつもの大会で優秀な成績を残している彼に劣らず大柄でがっちりしている上に、

「何、あの不良」

「目つき鋭すぎだろー！」

「あの風貌……何人かヤツてるね」

「いやいやいや、制服をちゃんと着ているし真田先輩の知り合いだよー！」

散々な評価を下したクラスメイトにツツコミを入れる私。真田先輩ともう1人の男子生徒は肩を並べて歩き出し、階段を上がっていく。さすがにあの図体で後輩ということはなさそうなので、3年生だと思っただけ。とりあえず、彼のことは寮に帰った後で真田先輩に聞いてみようと思う。

昼休みに桐条先輩が訪ねてきたが、私は用事があると言って有里く

んに丸投げしてきた。昼休みに暢気に寝ている君が悪いのだよと心の中で呟きつつ、ポロニアンモールを散策する。鳴上千んの情報で傷薬の購入でお世話になっている『青ひげ・ファーマシー』の割引日が分かったので、黒澤さんのところと、他にタルタロスの探索で使える物はないか調査に来たのである。

ところでポロニアンモールには大きな噴水があり、そこはカップルや友人との待ち合わせに使われることが多い。

しかし、たまに宗教団体が占領し新たな信者の獲得の為に精を出していることもある。私も先ほど信者っぽい女の人にチラシを手渡された。「死こそが救いである」と危険極まりない謳い文句の宗教団体「Get Relief from Stress」。頭文字を入れ替えて『ストレガ』と呼ばれている人たちの宣伝用のチラシである。

彼らの目の前でこういったチラシを捨てるのは目を付けられかねないので、折り畳んで制服のポケットにしまいこむとそこから離れる。こういった人たちは警察の人が追い払ってくるまで居座ることが多いらしいので、今日はポロニアンモールの探索は諦めて、巖戸台駅前商店街を中心に散策しようと歩き出そうとした瞬間、私は男の人とぶつかってしまって尻餅をついてしまった。

「あ……わりい」

「だ、大丈夫ですかお姉さん」

「……えっと、ありがとう」

私とぶつかった黒髪の少年は顔だけをこちらに向けているだけで何もしようとせずにいる。黒髪の少年とぶつかって一方的に尻餅をついた私に手を差し伸べてきたのはランドセルを背負ったオレンジ色のパーカーを着た男の子だった。私は地べたに座り込んでしまっただけでついた砂埃を落としてつつ、差し出された手を借りて立ち上がる。両手で衣服の乱れを私が直している間、小学生の男の子は黒髪の少年に對し、女の人への接し方について怒っていた。

「もうー晁（あきら）さん、聞いていますかー！」

「悪かったって、乾（けん）。……すまない、俺が余所見をしていた」

「う、うん。こちらこそ……って、君も月光館学園の生徒なの？」

乾と呼ばれた小学生の男の子に怒られ、渋々といった様子で私に対して頭を下げて謝った少年の服は、改造が施されているが紛れも無く月光館学園のものだった。黒髪の少年とランドセルを背負った男の子もまた私の制服に気付いた様子だ。

「その通りなんですよ、お姉さん。晃さんは高校1年生で、僕は小学4年生です」

「おい、乾」

「ごつちに引越してきたばかりなので、住んでいるところの近くを一緒に探検していただきます」

「そうなんだ。私と同じだね」

私がそう言うのと乾くんは目をキラキラ輝かせる。この年代の子つて話に共通点があると盛り上がるっていうのは本当みたい。晃くんへの女性との接し方を怒っていたところを見るに、子供と大人の考え方が混在しているのかもしれないけれど、これはこれで微笑ましい。「乾。和泉（いずみ）との約束がある。もうそろそろ行かないと遅れるぞ」

「あ、そうだった！じゃあ、お姉さん、またね！」

「うん。ばいばい」

私が手を振ると乾くんも大きく手を振り返す。子供の無邪気な可愛さに心を解された私は駅に向かって歩き始める。

その私の背をじっと見つめる視線に気付かぬまま。

□

巖戸台駅前商店街入り口にあるたこ焼き屋のベンチに座って、人の往来を眺めながら購入したたこ焼きを食べていると昨日料理を振舞ってくれた鳴上千くんが大きなぬいぐるみを抱えて駅に向かって歩いていた。

鳴上千くんはどちらかというと格好いい部類に入るので、大きなぬいぐるみを抱えるとそのギャップが激しい気がするのだが、周囲の人は特に気にしていないようだ。すると、私の視線に気付いたのか鳴上千

んは急に立ち止まりキョロキョロと辺りを見回し、たこ焼き屋のベンチに座っていた私を発見。すたすたと近寄ってきた。

「こんにちは。昨日ぶりですね、結城先輩」

「あははは。そのぬいぐるみは何？」

「ウチのクラスメイトが何度やっても取れないと言っていたので、挑戦してきました。他にも面白そうなゲーム機があったんですが、今日は家でご飯を作る当番なので帰るところです」

「ふーん、家でご飯を作るのは当番なんだ」

「母と妹と僕の3人で回しています。母も仕事忙しいのですが早く帰ってこれる木曜日と土曜日を担当しています。日曜日は普段部活に勤しんでいる妹が母と一緒に作りますね。その他の月・火・水・金は僕が担当しています」

鳴上千んから聞き出した情報を頭の中のメモに残しつつ会話する。彼の趣味は物の収集のようだ。そういえば『本の虫』の文吉おじいちゃんや光子おばあちゃんも、店を改装する前から足繁く通う男の子がいるって言っていた。恐らく鳴上千んのことなのだろう。

「もうそろそろ電車の時間なので行きますね。では、結城先輩も買い食いは程ほどに控えて、自炊してあったかいご飯を食べられてくださいね」

そう言って鳴上千んは大きなぬいぐるみを胸に抱えつつ、巖戸台駅のホームに向かって行った。私は購入したたこ焼きが入っていた透明なパックを見下ろし、大きいため息を吐くのがあった。

巖戸台学生寮に帰った私はエントランスで項垂れる有里くんやゆかりの姿を視界に捉える。

「あ、おかえり湊（みなと）」

「うん、ただいま。2人は何をしているの？」

「昨日、鳴上千んの手作り料理を食べたじゃない？だから、久しぶりに自炊しようと思ったんだけど……」

「冷蔵庫に何も入っていないくて……諦めた」

ソファの肘置きに頭を乗せていた有里くんが天井を見ながら、ゆかりの思いを代弁するように口を開く。

「ああー……。それはやる気が削がれるよね」

「そうなのよ。今から買いに行つて、帰つてきてご飯を作る気にはなれなくて。こうやって、今日もどこにご飯を食べに行こうかって迷うの。女として終わっているわ」

右手の掌で両眼を覆い隠すゆかりを見て、私も居た堪れなくなつたのだが彼女の言うことは尤も。

最近、食生活の乱れでお腹周りに肉がつき始めたような気がするし、今日のように買い食いする回数も増えたような気がする。

桐条先輩はグループ傘下の料理店から直接料理が運ばれてきて自室で食事を摂っているけれど、ちゃんときっちり計算されつくしたもののだろう。真田先輩は牛丼とプロテインでどうやって栄養を摂取しているのか謎だが、ボクシング部で成績をちゃんと残すくらいだ。

つまり、巖戸台学生寮に住む高校2年生の私たちだけが、このまま行けばやばいことになるのは目に見えている。

「ねえ、有里くん」

「何？結城が作るの」

「今日、鳴上くと会つて話をしたんだけど、木曜日と土日は時間が取れそうだよ」

「あれ、意外。桐条先輩を説得どうこう言っていたの結城だったじゃない。どういった風の吹き回しなの？」

「……。ねえ、ゆかり。最近、……。体重計に乗った？」

「……………」

「……………(汗)」

押し黙つた私とゆかりを見て、何かを察したのか有里くんは口を噤んで微動だしなくなつた。私も親戚の家にお世話になつている間は3食きつちりと食べていた。ちゃんと肉と野菜と米とバランスよく。

でも最近の食生活は炭水化物や甘いものに偏っている気がする。今まで目を背け続けてきたけれど、もうここで妥協すれば女として何かが終わってしまう、そんな危機感を私とゆかりは抱いていたのだ。ただでさえ、タルタロスの攻略の為に夜更かしするようになって肌荒



れが目立ってきているし。せめて、食事だけはどうか改善しないといけない。

「て、……テレビでも……見ようか」

そう言っただけで私とゆかりが作る暗い雰囲気、霧の空気に耐えられなくなった有里くんがテレビをつける。まだ晩御飯の問題が片付いていないのに暢気なものだと思いつつ、テレビの画面に映った映像を見る。映し出されたのは警察の規制線の鮮やかな黄色。そして、無残にも破壊されつくされたまま立ち並ぶ廃墟。しかし、その一帯だけでその奥には普通の町並みがある。

『こちら現場の古森です。ごらんください、ここは昨日まで普通の商店街だった場所ですが、その見る影もないほど破壊され尽くしています。付近に住んでいる人たちの証言によりますと、ガス爆発や地震といった話が出ていますがその真相は定かではありません！警察関係者の話では、この事件に関しては警察の特殊犯罪対策課が対応することです』

リポーターの奥にある光景は俄かには信じられないほど、不自然に壊れていた。犯行は夜中、音は無く、いつの間にかこうなっていた。という意見が多く聞かれる。一般人には怖い事件だ、くらいにしか認識できないだろうけれど、日常に潜む真相の一端に触れた私たちなら分かる。

「これって、まさか……」

「たぶん、そうだろうね」

「街にシャドウが出るのは稀っていう話よ。つまり……」

「ペルソナ使い同士が影時間内に戦って出来た戦闘の傷跡だ」

「真田先輩……」

テレビに映し出される映像に釘付けになっていた私たちは気付かなかつたが、いつのまにか真田先輩が帰ってきていた様子。しかも、この件についても何らかの情報を手にしているみたいだ。

「この話もいずれ美鶴から説明されるはずだったが、丁度いい。俺が知る限りの情報を渡してやる」

そう言っただけで真田先輩は有里くんが持っていたテレビのリモコンを

奪い取ると憎々しげにテレビの画面を消したのだった。

□

「まず、影時間の間は一般人に知覚されることのない時間だというのは分かっているな」

「はい。適性を持たない人は象徴化し、棺桶のようなオブジェになります」

真田先輩はまず確認するように告げる。それに私が答え、有里くとゆかりも頷き答える。

「だが、ここ最近になって影時間に適性のある人間が象徴化した人間に触れると、象徴化しているはずの人間も影時間内を行動することが出来るということが分かった。だが、影時間内にあつたことは、より整合性が取れるように自分で勝手に納得”するんだ。例えば、影時間内で象徴化を解かれた人間が適性を持つ人間にナイフで腹を刺されたでしょう。この状態で影時間が終わったら、どうなると思う？」

「え？」

「ナイフを刺された人間は刺した人間のことを覚えていない。周囲にいる人間もいきなり腹をナイフで刺された人間が現れたと認識するしかない。犯人の特徴どころか犯行の仕方もまったく分からない、完全犯罪が簡単に出来上がってしまう」

「……さっき見たニュースも、その系統なんですか？」

ゆかりが唇をわなわなと震わせながら尋ねる。真田先輩の話では完全に悪意を持って影時間を悪用する凶悪な人間が存在すると言っているようなものだ。事の重大性を理解しているのか、影時間内でもないのに有里くんの目がしっかと開けられている。

「ああ。それだけじゃなく殺人、強盗、放火、強姦、拉致誘拐などの凶悪犯罪を誰にも知られず、監視カメラにも映らずに行う奴らがいる。警察はそいつらのことを犯罪グループ【黒十字】と呼ぶ。そして、さっきのニュースでリポーターが言っていた警察の特殊犯罪対策課は黒十字の構成員を“捕縛”もしくは“息の根を止めるため”に警察が

作った影時間に適性を持つペルソナ使いの猟犬部隊だ」

「息の根を止めるって、まさか……」

「お前たちが想像している通りだ。……俺がそいつらの存在を知ったのは2年前。自身のペルソナが暴走したダチを止めようとした時にアイツラの戦いに巻き込まれた。人を人と思わない犯罪者と人の身体を壊すことに何の躊躇いもない化け物の戦いだ。ダチの暴走したペルソナがそいつらの戦いに介入したんだが、一瞬の内に頭のとっぺんから爪先までを断ち切られた上に巨大な拳でバラバラに粉碎された」

真田先輩は唇を噛み締め、手が白くなるほど拳を握り締める。まるで過去の何も出来なかった自分を責めるように。

「ペルソナは自分自身の心を映したものだ。暴走させちまったダチにも非があつたのかもしれないが、ペルソナを一瞬で消滅させられてしまったアイツは1ヶ月昏睡状態に陥った。俺は気絶しちまったダチを抱えて、犯罪者と化け物の戦いを見ることしか出来なかった。戦いは影時間内では終わらなかつた。犯罪者は逃げたよ。化け物の方はそこにいた親子を連れて行った。あれが誰だったのかは桐条グループでも分からなかつた」

真田先輩はもたれ掛つていた壁から離れると、私たちの顔をじつくりと眺めた後、ふと思ひ出したように話す。

「辰巳ポートアイランドの裏路地に開けたところがあるのだが、そこが2年前の戦場だ。ダチはアレ以来、ペルソナを出せなくなった。影時間への適性はあるからシャドウに襲われた時のために体を鍛えてはいるようだから、もしかしたら会うこともあるだろう。俺たちから離れて行動しているから、たまに話を聞いて情報を仕入れている。全体朝礼の後、お前たちが見ていたのもちゃんと気付いていた。もう少し、追跡のスキルを上げることだな」

「……………」

「ふっ、安心しろ。黒十字や警察の特殊部隊の戦いに巻き込まれるようなことがあつても、お前たちは俺や美鶴が絶対に守る。それが上級生として、お前たちの先輩としての役割だ。……だから、こそこそ裏

で何かを企んでいないでさっさと俺や美鶴に言って来い。本当は美鶴が食べているものを全員分用意するはずだったんだが、お前ら毎食美鶴のようなお嬢様が食べる食事をしたいか？美鶴と一緒に食べるとなるとアイツ、テーブルマナーに厳しいから食った気がしないんだ。量も美鶴基準だから少ないしな」

先ほどまでと打って変わって冗談交じりで話す真田先輩の姿に暗い気持ちになっていた私たちの肩の荷が軽くなった気がした。というか選択が極端すぎる。自炊か、お嬢様御用達のセレブ料理かって。食べたい気もするが、テーブルマナーが厳しくて食べた気がしない食事って……。

「じゃあ、真田先輩。食べたらペルソナのステータスが強化される料理を作れる奴をこの寮に入れるにはどうしたらいいですか？」  
「なんだ、その魅力的な提案は。詳しく話を聞かせろ」

孤高のボクサーっていう雰囲気で近づきにくかった先輩が、実は後輩思いのよい先輩であったことを知れた日であった。

けれど、知りたくなかったことも知ることになってしまった日だった。

有里くんが真田先輩に鳴上くんが作った料理が私たちのペルソナ  
の能力を上げるのに一役買ったのではないかということ伝えてい  
ると、彼は悩むような仕草を見せた。そして有里くんが鳴上くん  
のことを告げる前に真田先輩の方が先に彼の名前を呟く。

「もしかして、お前たちが言っているのは総司のことか？」

「あれ、先輩も知り合いなんですか」

「……ああ」

ゆかりの問いに曖昧に頷く真田先輩。瞼を閉じ、腕を組んで悩むよ  
うな姿を見せた直後、真田先輩はあっけらかんとした様子で告げた。  
「総司なら美鶴もこの寮に出入りすることに関して反対はしないだろ  
う。ただ現状では厳しいかもな」

そう言って真田先輩はエントランスを後にして階段を軽やかな足  
取りで上がって行く。

残された私たちは彼から齎せられた情報の多さに困惑しながら、3人  
で意見を言い合う。途中で帰ってきた順平も交えてデイスカツショ  
ンをしていたら夜遅くなってしまい、保存食として用意されていた  
カップ麺で腹を満たし、またジャンクフードを食べてしまったとゆか  
りと私は嘆くことになるのだった。

2009年4月29日

国民の休日のひとつである昭和の日。用事もないので本の虫へ遊  
びに来た私は積み重ねられた古本の山を崩しながら目的の本を探す  
鳴上くんを見つけた。時折目的の本らしきものを見つけて歓喜の声  
を上げたり、それが目的のものでなくて嘆きの声を上げたりして一喜  
一憂する彼の様子を本の虫の店主である文吉おじいちゃんと光子お  
ばあちゃんと眺める。

しばらくすると満足がいったのか何冊か古本を持って、レジに来  
る。そこで私たちが見ていたことを知ったようで顔を真っ赤にして  
照れる鳴上くんを見て光子おばあちゃんとほっこりした気持ちに

なった。

「なんでまた結城先輩がいるんですか」

「学生寮はすぐそこだから、商店街は私のホームグラウンドだよ。まだ住んで1ヶ月だけど」

本の虫は店舗兼文吉おじいちゃんたちの自宅なので、居間に上がらせてもらった私たちは光子おばあちゃんが淹れてくれたお茶と菓子パンを頂きつつ話をしている。彼が本の虫で購入した古本はジャンルもバラバラであるが、光子おばあちゃんが言うにはファンの多い作品を書いている著者のものばかりのようだ。ただ若い頃、デビューし立ての頃のもののなので荒が目立つらしい。

「でも鳴上くんもちよいちよい厳戸台駅前商店街に来ているよね」

「ええ。色々とお気に入りのところもあるし、友達も大勢住んでいますから」

「ああ、なるほど」

鳴上くんは光子おばあちゃんからももらったかにパンを頬張る。私もクリームパンを頬張った。程よい甘さのクリームが口いっぱい広がる。

「ところで、結城先輩。有里先輩から厳戸台学生寮でアルバイトしないかって誘われたんですけど」

「……直球すぎでしょ、有里くん」

「月光館学園って高等部に上がるまでアルバイト全面禁止なの知っていますか?」

「ふあつ!?そ、そうなの?」

「他のところならいざ知らず、生徒会長の桐条美鶴さんがいる学生寮でアルバイトって、大丈夫なんですか?」

鳴上くんの疑問は尤もである。校則で禁止されていることを生徒会長が住んでいるところで行えるはずがない。でもアルバイトが駄目で、入寮させるのも厳しいとなると鳴上くんに私たちのご飯を作ってもらうにはどうしたらいいんだろう。

「この間作ってくれた料理の味が忘れられないから、私の為にご飯を作りに来て」とても言えばいいのだろうか。いや待て、私。さすがに

それは厳しいでしょ、そんなの！会ってまだ数日の段階でそれを言えば、確実に「好感度が足りません」とテロップが出るような返しが来るのは確実。

「あ、ははは……。有里くんには私からきつく言っておくよ」

「助かります。じゃあ、そのお礼って訳じゃありませんけれど、お手ごろな値段で美味しいイタリアンが食べられるお店を紹介しますね。光子おばあさん、何か書けるものとメモ紙はないかな」

「はいはい。これでいいかしら？」

「うん。ありがとうございます」

光子おばあちゃんにペンと紙をもらった鳴上くんは淀みない手つきでサラサラと地図を書き記し、私に紹介したいお店の場所に星印をつける。そうやって書き記した地図を私に渡してくる鳴上くん。

「このお店のシェフが作るカルパッチョは絶品ですよ。生徒会長の肥えた舌もきつと満足すると思います」

「えっと、もしかして私に桐条先輩を誘えと？」

「こつちに越してきて1ヶ月なんですよね。結城先輩が寮に住んでいる人たちを誘って、親睦会を開くのも仲良くなるために必要な一手だと思いますよ。それに、この巖戸台駅前商店街をホームグラウンドつて言うくらいなんです。隠れた名店をひとつやふたつは知っておかないとね。とりあえず、これから一緒に行きましょうか」

「え、!？」

鳴上くんは文吉おじいちゃんに購入した古本の入った紙袋を預けると、私に向かって手を差し出した。こういうことを自然と出来る辺り、手馴れているようで、私の葛藤はなんだったのかと乾いた笑いを漏らしそうになった。

仕込み中と書かれたプレートがあるにも関わらず、扉を開けて中に入っていく鳴上くんの後を追って私もお店の中に入る。

外観、内装ともにシンプルで洗練された雰囲気であり、使われている家具からシェフというかオーナーの肝いりなのが伝わってくる。ただ照明器具は柔らかな光を発するアンティーク調で高級感のある

店内をアットホームな感じにしている。

鳴上くんはコックコートを着た髪をオールバックにした目つきの鋭い青年と会話していた。私も話の邪魔をしないように、忍者のように音を立てないように移動する。

「仕込み中だつて、看板だしてただろ。いい加減、料理長も切れるぞ」「そんなことを言わないで下さいよ、師匠。料理長はああ言いながらも可愛い女の子が来ると張り切るので丁度いいんですよ」

「クソ。あのオツサン、やっぱりムツツリか」

「けど、師匠の料理の腕はちゃんと買ってますつて。スープと魚料理の仕上げを任される様になったそうじゃないですか。居酒屋『厳ちゃん』で酒に酔った料理長が自慢していたらしいですよ。お店の後継者が出来そうだつて」

「……。……ちっ」

鳴上くんとぶっきらぼうな感じで会話していた男の人が照れるように視線をずらしつつ、小さく舌打ちをしたが完全に照れ隠しだった。

「で、総司の紹介する客の構成は？」

「男性3人と女性3人の計6人です。ただ恋人とかそんな感じじゃないかと、同じところに住んでいるので親睦会の感じにしたいそうです。予算は1人辺り1500円から2000円くらいだと思います。ただし、舌の肥えた方がいらっしやいますので、使用した調味料や材料はすべて当てられると思ってください」

「どこの美食家だ。分かった、料理長にはお前にやつかいな客を紹介されたつてことを伝えておいてやる。で、さつきから柱の影から俺たちの様子を窺っているのが今回の客か？」

「はうっ!?!」

そんなにもバレバレだったのだろうか。この間の真田先輩たちも私たちの視線に気付いていたらしいし。こそこそ隠れるのは性に合わないのかもしれない。

「鳴上くんの紹介でこのお店に来ました。料理の方、よろしくお願いします。……つて、あれ？学校で真田先輩と話しをしていた先輩」



「は？……お前、アキが言っていた奴じゃねえか。……つてことはさっきの美食家の話は桐条か！」

「結城先輩、こちらは僕の料理の師匠の荒垣先輩です。ちよつとした縁で、たまに料理を教えてもらっているんです」

「えつと……結城湊です。今月の初めにこつちに來たばかりなんですけど、この巖戸台っていう街が大好きです」

「はあ、悪い人間じゃねえのは分かっていたが、ずいぶんと『戦える奴』には見えないな」

「ちよつ、先輩！鳴上くんがいるんですよ!!」

「うん？……ああ、こいつの事情はまだ聞かされていないのか。鳴上兄は影時間やシャドウのことを知っている。……俺が2年前、ペルソナを暴走させた時に巻き込んでしまつて大怪我を負わせちまつたからな」

「ええっ!？」

目を見開いて鳴上くんを見ると彼は最初会つた時と同じような優しい微笑みを携えて私を見ていたのだつた。

□

巖戸台学生寮に戻つた私はエントランスにいた桐条先輩と自室にいた真田先輩を連れて作戦室に行き、鳴上くんのことを聞き出した。桐条先輩は何故鳴上くんのことを聞くのか不思議そうにしていたが、真田先輩から私たちのペルソナの能力を上昇させる料理を作れることを聞いて、米神を指で押さえつつ語り始める。

「有里が私にこの寮で働かせたい奴がいると言いに來たのはそういう理由か。しかも、その相手がああ鳴上とは妙な縁もあつたものだ」  
「普通は下手すれば死んでいたかもしれない大怪我を負わせたシンジと事情を碌に説明しようとしなかつた俺たちなんかと仲良くなろうなんて考えないんだが、結局この2年の間、総司から恨み言は一切言われなかつた」

「真田先輩が現状では厳しいと言つたのは鳴上くんとの関係を先輩た

ちが確立できていないからですか?」

私の問いに桐条先輩と真田先輩は同時にそれぞれの悩む仕草を見せ、同じタイミングで首を傾げる。桐条先輩は難解な問題を解く工程を説明するように淡々と話し始める。

「それもある。2年前、荒垣のペルソナが暴走し大怪我を負わせてしまった彼の前から私たちは、……逃げた。当時はまだ影時間に適性のない者の影時間内での出来事に関する記憶は改変されると思っていたからな。だが気付けば、鳴上は怪我をさせた張本人である荒垣と倒れ伏した自分を見捨てた明彦と仲良くなっていた。まあ、タダでは無かったようだが……」

「シンジは昔から得意だった料理を教えることになり、俺は毎週木曜日に総司のりハビリに付き合うことになったんだ。今では毎週木曜日の放課後にジムに通う仲だ。総司と付き合っただけでしばらく経つが、アイツの方から影時間やシャドウについて聞かれることはなかった。俺たちが話しても特に追求してくることは無い」

「鳴上くんは影時間内で起きていることには興味が無いっていうことですか?」

「興味ないことはないと思うのだが、自分は関われないと諦めているように思える。だから必要以上に接触はしてこなかった。だが、タルタロスの攻略に鳴上の料理が有効というのであれば、君たちの安全を期するために私も支援する立場の人間としてけじめをつける必要がある。つと、うおっ!」

そう言つて桐条先輩は立ち上がったのだが、隣に座っていた真田先輩に服を引っ張られてソファに座りなおすことになった。キョトンとしていた桐条先輩の表情は見る見るうちに変わっていく。目じりが上がり、頬が引きついている。真田先輩の行いにお冠なのは見れば分かる。

「明彦、何のつもりだ?」

「落ち着け。美鶴の決断力と行動力は評価するが、話がややこしくなる。ここは有里と結城に任せるべきだ」

「むっ……」

「ややこしくって、どういうことですか？」

「この間、俺が話をしたことは覚えてるな。シンジから黒十字と警察の特殊部隊の工作員が入り込んでいる可能性を示唆された。ここで美鶴が表立って動くのは得策じゃない」

「なっ!!」

影時間を悪用し凶悪犯罪を行うグループ【黒十字】。そいつらを狩るために警察が組織した特殊部隊。その戦闘の痕跡は凄まじいものだった。そんな奴らがこの街に来ているなんて。そう考えて唇を震わせる私の前にある机に振り下ろされる握りこぶし。机が割れてしまふのではないかと思えるほど、強い力で叩かれたことよって木の軋む音が作戦室内に響き、直後桐条先輩の慟哭が寮全体に響き渡った。

「くそおおお!!何故だ!奴らがここに来たのはどうしてだ!答えろ、明彦!!」

隣に座る真田先輩の胸倉を掴み、大声を上げて彼を押し倒す桐条先輩。完全に取り乱して、目が見開き錯乱状態にあり、私は咄嗟に彼女を止めるために立ち上がったが、組み敷かれる真田先輩本人が私を手で制する。そして、小さく首を横に振った。

「お父さまは苦しんでいるんだ!お爺さまが作り出してしまった影時間を消すために日夜休まず働いて、影時間を無くす方法を模索しているのに!あいつらはそんなお父さまの思いを踏みにじって、諸悪の根源はお父さまだって警察も!」

真田先輩の胸板に額を押し付けつつ、はらはらと涙を流す桐条先輩。そんな彼女を優しく包みポンポンと背中を優しく撫でる真田先輩。

あれ、さっきまでのシリアスさんはどちらに行かれたのでしょうか。いつのまにか、いつも気丈に振舞っている彼女が甘えてきたので優しくする彼氏の図が私の目の前で繰り広げられているんですけれど。

「今の音はなんです……か?」

「湊、大丈夫……ぶ?」

「うわあ、大胆」

作戦室の入り口の扉が大きく開け放たれ、順平を先頭に入ってきた面々は現状を理解すると真っ赤になった。真田先輩と興奮状態にある桐条先輩は気付いていないが、君は平常運転だね、有里くん。

視線でどういう状況なのかを尋ねられたので、真田先輩に確認し話していいということだったので、私が知りえた情報をすべて皆に開示した。

ゆかりは私の話を聞いて複雑な気持ちを抱いたのか未だ真田先輩に抱きついて泣いている桐条先輩を見ていたのだが、有里くと順平は黒十字と特殊部隊の工作員が街に入り込んでいる話を聞いて、歯を食いしばるようになって俯いていた。

「冗談じゃねえぞ、どっちも明確な殺意を持って殺し合いをしているんだろ？俺たちなんかじゃ太刀打ちは無理だつて！有里も何か言えよ！」

「……。順平、奴らがこの街に来た目的はなんだろう」

「はあ!?人を殺す奴らの気持ちなんか分かるかよ」

順平が吐き捨てるように自身の思いを言い切る。ゆかりも自分の身体を抱きしめて、俯いている。そんな中、有里くんは躊躇いながらも、自分の考えを口にする。そして、私たちに問いかける。

「結城、桐条先輩の祖父が影時間を作ったって言っていたよね。つまり、この地で何かがあつて、影時間が生まれた。……そんなの10年前の爆発事故以外に思いつかないよ。あれでボクも結城も岳羽も親を喪っている。そんなボクらがこの巖戸台学生寮に集められた。……誰かの思惑が働いているとは思えない？」

「「ぐくりっ」」

静まり返った作戦室に私たちが唾を飲み込む音が響いた気がした。

「そして、警察も黒十字もこの地で何かが起ころうとしていることを察知したんだ。もしかしたら、先日の大型シャドウの件を嗅ぎ付けたのかもしれない。だとしたら、彼らの目的も見えてくるんじゃない？」

有里くんの話を聞き、真田先輩からもらった情報を頭の中で組み合わせ

わせる。犯罪グループ黒十字は影時間を悪用し、人に知られることなく凶悪犯罪を行う史上最低の組織だ。対して警察は黒十字の構成員の捕縛もしくは殺害を目的としている。敵の方からのこのこと現れるのであれば、それを狙わない手はない。なら、警察に追われることを問わないで黒十字の構成員がこの街に来たのはどうしてだろう。

「もしかして、……影時間を無くす方法がこの街にあるっていうこと？」

「「「っ!?!」」」

作戦室にいた面々の視線が私に集中する。私はそのまま言葉を紡ぐ。

「じゃないと警察の特殊部隊に狙われることを承知で黒十字の構成員がこの街に来る理由はない。放っておいたら、影時間が無くなってしまふから止めに来た?じゃあ、その影時間を止めることが出来るのは誰?今までにそんなことはなかったのに、ここに来てどうして状況が変わった?」

そこまで呟いて私は気付いてしまった。

私はゆっくりと彼がいる方へ顔を向ける。

彼もそのことに気付いた様子で大きく頷いた。

「ボクと結城が影時間を無くすための【鍵】を握っている」  
つまり、黒十字の狙いは私たちだ。

2009年4月30日

学校へ向かう私と有里くんの足取りはまるで重石を載せられたかのように鈍いものだった。ただの推察でしかないが、人を人と思わない凶悪な犯罪グループに狙われているかもしれないということは、私たちの心に暗い影を落とした。本当に10年前に無償の愛を注いでくれるはずだった大切な家族を失ったあの事故から碌な目に合わない。

2人揃って辰巳ポートアイランド駅から学校に向かってトボトボと俯きがちに歩いていると、少年特有の鈴のようなコロコロとした声で誰かが呼ばれているのに気付く。呼ばれているって言っても呼称が「お姉さん」なので思い当たる者たちが振り返っているが、振り返った誰もが首を傾げて学校に向かって歩きなおす。次第に少年の声は近づいてきて、腰の辺りに衝撃が走った。俯きがちの猫背状態だったので、背骨に何かが直撃して強制的に背中がシャンとなった。見ればランドセルを背負った少年が蕾から開いたばかりの花のような笑顔で私に抱きついていった。

「け、乾くん?」

「おはようございます、お姉さん!」

「何? 結城の知り合いなの?」

「えっと、まあ……」

私は苦笑いしながら有里くに答える。知り合いといっても一言二言会話しただけの仲だ。それを知り合いとしてカウントしていいのかどうかを悩んでいると乾くんは腕を組んでほっぺたを膨らませながら言う。

「聞いてください。晁さんひどいです! 『はがくれ』で働いている和泉さんが、ぼ・く・に! おまけしてくれたチャーシューと煮卵を食べちゃったんです。ひどいと思いませんか?」

「うん。それはひどい」

「僕の気持ちを分かってくれますか、お兄さん!」

何故か私ではなく有里くんとの話で盛り上がる乾くん。『はがくれ』というラーメン屋は編入初日に順平が私と有里くんを連れて行ってくれたお店だ。こってり濃厚なトンコツスープを纏う極太麺。厚切りされたチャーシューとしつかりと味が染み込んだ煮卵の付け合せは確かに絶品だった。

「晃さんはそれを悪いことだと考えないで謝りもしない。なので！お返しに今日は起こさずに来ました。遅刻して先生に怒られればいいんだ」

「うん？その晃くんとは一緒に住んでいるのかい」

「和泉さんの家に居候させてもらっているんです。今で言うルームシェアって奴です」

乾くんを私と有里くんで挟んで歩きながら世間話で彼の現在の状態を聞く。つまり、乾くんの話では晃くんとは血が繋がっていないが仲が良く、2人して『はがくれ』で働いている和泉さんという人の家に居候し、家主の人と合わせて3人で住んでいることになる。乾くんみたいな小学生が親から離れて、そんなところで暮らしているというのは暗に親が不幸にあっってしまったと考える方が無難だ。幸い乾くんは明るい性格なので、そういった話題にはならなかったけれど。乾くんは同じクラスの友達を見つけたのか、私たちの元から駆け足で離れて行った。

「乾くんだけ、小学4年生ってことは……丁度10歳か。もしかしてボクたちと『同じ』なのかな？」

「それを聞くのは野暮つてものだと思うよ、有里くん」

私たちは乾くんの後姿が小等部の校門に入っていくまで見届けた後、高等部の校門に向かって歩き始める。そして、教室に着くとクラスメイトの男子たちがざわめき立っていた。何かと男子の中で一番喜んでる友近くんに尋ねると教育実習生として大学生が来るとのこと。ウチのクラスには女子大生が来るようで、男子たちの熱狂はその所為みたい。

「男子って、アホなんじゃないの？」

「あははは。仕方ないよ」

頬杖をつきながら呆れた視線を騒ぐ男子に向けるゆかりと話をしつつ過ごしていると予鈴がなり、思い思いのところにいる男子たちが自分の席に戻っていく。そして、担任の鳥海先生が入ってきた。

「はあ……、貴方たち情報を仕入れるのが早過ぎじゃないの？」

「鳥海せんせー！どんな人ですか？」

呆れて首を横に振る鳥海先生を余所にクラスの男子たちのボルテージが上がっていく。私は不意に一緒の寮に住んでいて、今日は並んできた有里くんを見る。彼の視線は下を向いていた。俯いている訳で無く、すでに寝こけていたのである。通常運転な有里くんを見て、私は苦笑いを零した。

「いいわ。入ってきて」

「はいなー」

鳥海先生の掛け声で入ってきたのは朝日を浴びてキラキラ輝く銀色の髪をポニーテールにし、ウサギを思わせる赤い瞳が特徴の長身の女性であった。ただ、人間の耳に該当する部分のアレは何だろう。手足はピッチリとした女性用のスーツで隠れているけれど、所々気になる膨らみがある。普通の人間にはありえない膨らみが。クラスメイト全員が登場した人物に対して驚きのあまり言葉を失っている中、女性には黒板にチョークでデカデカと自分の名前を書いた。そして振り返ってすぐにクラスの中を見渡した後、手を胸に当てつつ自己紹介を始める。

「ウチの名前は『伍志木ラビリス』やで。知り合いに頼まれて勉強をしにきましてん。よろしゅうお願いしまっさ」

□

あまりにツツコミどころがあり過ぎる教育実習生の伍志木先生であったが、彼女が担当することになった数学の授業は関西弁という言葉葉なまりのハンデこそあったものとても分かりやすいものだった。それと“目”というか“高感度センサー”でも頭の後ろについているのか、生徒が居眠りすれば百発百中のチョークが彼女が振り向くと



同時に射出され、居眠りの常習犯である有里くんはボコボコにされた。ちなみに順平の額にも赤い丸印がついている。

「……痛い」

「ははは、自業自得だよ。有里くん」

額や頬だけでなく全身を擦っている有里くんの様子を見て、狙われているのが分かっているのに授業中に居眠りをするという選択を選び続けた彼に私は苦笑いを向け、心の中で密かに拍手を送る。ゆかりは口をへの字にしつつ、文句を告げる。

「アンタたちの所為で、授業が中断しまくったじゃないの。伍志木先生も後からノリノリだったし。……チョークで変化球なんか投げられないわよ、普通」

「普通って、ゆかりっち。伍志木せんせは確実に普通じゃねえだろ」「うん。どう見たって、ロボ」

巖戸台学生寮に戻ってきて早々、私たちは自分たちのクラスに来た実習生である伍志木先生について思いの丈をぶちまけた。そして、ゆかりと順平のやり取りの直後、私と有里くんは一字一句まで同じ事を言う。ゆかりは両手で顔を覆い、細い肩を震わせる。順平は納得するようにうんうんと大きく頷く。私の目の前で男女の感性の差がありありと繰り広げられている気がする。

「もうこれ以上、私の悩み事を増やさないでえ……」

「怒涛の展開すぎて鬱になりそうな勢いだな、ゆかりっち」

「いや、もうほんとに勘弁して欲しいよ。『影時間』とか『シャドウ』とか『タルタロス』とか『警察の特殊部隊』とか『凶悪犯罪グループ』とか、今私たちが直面している問題も全然理解出来ていないっていうのに、ここにきて『ロボの教育実習生』って何？何なの？ねえ、誰かの陰謀なの？」

私たちが感じていた全ての疑問を吐き出したゆかり。ついこの間まで「タルタロスはどこまで上がらないといけないんだろう」とお気楽に言っていた頃が懐かしい。本当に2週間のうちに様変わりしちゃったよね、私たちを取り巻く環境。深くため息をついて俯くゆかりを見て、その場にいた私たちの気持ちたちがダウンナーになりかけた時、

玄関の扉が開く音がした。

そこにいたのはパンパンに膨れてしまったスーパーの袋を両手に持った鳴上くん、荒垣先輩だった。2人はキョトンとする私たちを余所にスタスタとエントランスを通り過ぎると台所に向かおうとする。

「つて、ちよつと待ったあ！」

「こんばんわ、結城先輩」

「キャンキャン、うっせーぞ。結城」

「いやいやいや！え、どうして2人がここに来るんですか!？」

2人は台所の机にスーパーの袋を置いて物品を出して冷蔵庫や棚に直しつつ、私を視界に捉えずに返答する。

「僕が師匠に料理を習っているっていう話は聞かれましたよね？」

「今日がその日っつーことだ。こいつのおかげで食材を安く大量に買えたから、たまにはアキにも美味しいもんを食わせてやろうと思っとな」

荒垣先輩は鳴上くんの頭をガシガシ撫でると、上着を椅子に掛けて黒色のエプロンを身につける。鳴上くんもまた荒垣先輩に乱暴に撫でられてボサボサになった髪を整えると自分のエプロンを身につける。そして、水煮のトマト缶と葉っぱみたいな物が入ったビニール袋を取り出す。荒垣先輩は冷蔵庫から取り出した鶏モモ肉をパックから取り出して、まな板の上に置き華麗な包丁捌きで筋や余計な脂を取り除いていく。

「……ちっ。心配すんじゃないよ」

「勿論、皆さんの分も作りますからちよつとお待ちくださいね」

背中越しに話す鳴上くんの言葉を聞いて振り返ると、物欲しそうな表情を浮かべたゆかりや順平、有里くんの姿。よくよく見ると荒垣先輩の手元にある鶏モモ肉の量もまた真田先輩1人分ではない。そのことを踏まえて荒垣先輩に視線を向けると、返ってきたのは鷹のように鋭い眼差し。籠められた気持ちは『邪魔』の一言だった。そこに佇んでいるだけでイライラを募らせていく荒垣先輩の傍から私たち4人はそそくさと離れ、エントランスから様子を窺うように眺める。

「鳴上くんはこの間も見たからいいけど、あつちのおつきな人って確か全体朝礼の後に真田先輩と話していた人よね」

「うん、荒垣先輩だよ。元々桐条先輩や真田先輩と一緒に活動していたけれど、『事故』でペルソナを出せなくなってしまうたから、現在は2人から離れて活動しているんだって。ちなみに超美味しいイタリア料理店でアルバイトしてるんだよ」

「お、それってこの前湊つちが言っていたイタ飯屋のことか？あそこ一見さんお断りだから、知っている奴がいなくてどんな店なのかも分からなかったんだよなあ」

「それは楽しみやね。ウチも連れて行ってくれまつか？」

「そんな、仲間はすれなんかにはしな……い……よ？」

聞き覚えがあるが、この場所ではありえない声の主に対し視線を向ける。ソファに座り私たちをキラキラとした好奇心旺盛な赤い瞳で見ってくる女性。先ほどまで私たちの話題に上っていたロボな教育実習生、伍志木ラビリス先生がそこにいた。彼女の背後には掛けている眼鏡をクイツと上げる仕草をする幾月理事長も立っている。2人が寮の中に入ってきていることに気付いた面々が驚きの表情を浮かべ、腰掛けていたソファから飛び上がる。唯一、有里くんはマイペースにソファにもたれ掛ったままだけど。

「うおっ!？」

「何で、伍志木先生がここについて、理事長もいるしっ!？」

「なるほど、黒幕は幾月さんかー。うん、納得」

「いやいや、有里くん。黒幕って何の話なんだい?」

幾月理事長は上着のポケットからハンカチを取り出すと額を流れる汗をふき取る。私たちは顔を見合わせると一斉に伍志木先生を指差した。伍志木先生は「人を指差ししてはいけへんよ」と嗜めるようなことを言っているが私たちの目は誤魔化せない。

「ぶっちゃけ、伍志木先生ってロボですよね」

「まあ、そうだね」

「「認めるの早っ!!」」

有里くんの直球すぎる質問に私たちは目が点になったけれども理

理事長は特に隠すようなこともせずにあっさり肯定。私たちの思いの丈を籠めたツツコミには特に反応せずに彼らは話を進める。その間に伍志木先生は鼻歌混じりで台所に様子を見に行ってしまった。

「伍志木くんは、『対シヤドウ特別制圧兵装』の『5式型』でね。君たちの戦力強化と護衛を兼ねて、桐条エルゴノミクス研究所より借り受けてきたんだ。君たちの日常に溶け込みつつ、身を守る立場ということで教育実習生という役職を与える形になったんだよ」

幾月理事長は後頭部を搔きながら申し訳なさそうに告げる。私たちは聞き慣れない言葉を理解しようと、それぞれ小さく呟いていたのだが、我らがリーダーの有里くんは違った。

『対シヤドウ』って銘打っている以上、ペルソナも使えんと?」

「理解が早くて助かるよ、有里くん。桐条くんが君をリーダーに据えた意味が今なら分かる気がする」

幾月理事長は満足そうに微笑み、有里くんは面倒臭そうに視線を泳がせる。そして、意を決したように真剣な眼差しを幾月理事長に向けた有里くんは今夜幾月理事長がこの寮を訪れた理由の核心について自分の考えを告げる。

「戦力強化については分かりました。が、ボクたちに『護衛』をつけないといけない状態になりましたか?」

「そうだね。……桐条くんと真田くんには知らせたが、外港でペルソナ使い同士の戦闘があったようなんだ。停泊していた船舶が3隻沈み、大手企業の倉庫が2棟焼失するほどの戦闘だったらしい。そして、黒十字の構成員らしき身元不明の死体が3人分、焼死体で発見されている」

巖戸台学生寮のエントランス内は奥の台所で調理している音以外の音が消えた。幾月理事長は瞼を閉じ、淡々と言葉を続ける。

「黒十字の構成員といっても相手は人間だ。その人間を相手にして身元不明レベルの焼死体にするまで人体を焼き尽くす焔を扱うペルソナ使いはそう多くない。警察の特殊部隊でも指折りのペルソナ使いだろう。もし対峙するようなことがあれば、脇目も降らず逃げることをお勧めする」

同じ炎を使うペルソナ使いである順平は顔を青くしている。私自身焼死体なんて見たことはないけれど、それがどういふことなのかは分かる。影時間の中、ペルソナ使い同士が対峙して戦ったつていふことは、彼らは生きたまま焼かれたということだ。こみ上げてくる不快感を何とか飲み込む。

「我々も情報を集めているように、警察も黒十字の構成員もあらゆる方面、あらゆる角度から情報を集めているはずだ。だから不用意な発言は控えるようにして欲しい。どこでも、誰かが聴いているやも知れない。相手は法の番人と、諸行無常の犯罪者だ。なりふり構わず、君たちを拘束し捕えることも辞さないだろう。そうなってしまうと我々でも助け出すことが難しくなる」

私たちの身の安全を守るといふことを放棄したような発言に絶句するしかない私たち。かと言って、幾月理事長を責める訳にもいかない。相手をするには強大すぎる警察と、何をするか分からない犯罪組織が相手なのだから。しかし、私たちと違って冷静な判断を下せる者が1人いる。

「つまり、影時間のことやシャドウのことはすっかり忘れて、普通の高校生に戻るなら、これが最後だって通告をしに来たという訳ですか」  
有里くんが提示したのは私たちが【普通の生活】に戻るための最後のチャンスだった。

「その通りなんだけれど……有里くん。君は本当に高校生かい？」

「真正正銘、今年17歳になる高校生です」

「……。ま、有里くんの言った通りだ。今はまだ決められないだろうから、ゴールドエンウィークが明けるまで待つよ。それ以降だと、理由付けが難しくなるからね」

幾月理事長の話はそこで切り上げられる。有里くんも黙して語ることが無くなり、私たちも顔を見合わせるだけで何も言えなかった。私たちを取り巻く環境は悪化するばかりで、私たちはどうするのが正解なのか分からなくなってしまうのだった。

□

荒垣先輩と鳴上千くんが私たちに作ってくれたのはチキンカレーだった。

ほろほろと崩れていくほどの軟らかくなるまで煮られた鶏肉、幾種類の野菜をじっくりコトコト煮ること得たコク、ハーブやスパイスを組み合わせて作りあげた珠玉の一皿は大変美味だった。

事前にあんな暗い話を聞かされた後じゃなかったら、きっと皆ではしゃげたくらい本当に美味しい料理だったのに。と、しょんぼりしていた私たちの前に置かれるデザート。

完熟したフルーツ特有の甘い香りがご飯を食べたばかりで満腹と感じていた脳に直接働きかけたのか、それを寄越せと言わんばかりに腹の虫を鳴かせる。人体の不思議の所為で顔を真っ赤にしつつ、そのデザートを頬張った私は気付いたら自分の部屋のベッドで寝ていたという神隠し的な体験をする。

翌日、ゆかりたちに話を聞くと皆も同じ体験をしたらしい。

エントランスにいた伍志木先生に話を聞くと、デザートを頬張った私たちは皆、ふにやふにやとした幸せそうな表情を浮かべてデザートを堪能し、その場に倒れてしまったとのこと。

あの師弟が作る料理、恐るべし。